

教育現場を無視した「行動計画」



工藤章人

2002年7月、文部科学省が『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想』を打ち出し、わが国の英語教育改革に本腰を入れ始めた。当該の大臣は、中学校・高等学校を卒業したら英語で会話ができるようになってもらいたい、中学校卒業段階では挨拶、対応という平易な会話などができると、高校卒業段階では日常の話題に関する、通常の会話などができるとを目標にしたいと述べ、高校生には英検2級もしくは準2級、中学生には英検3級の資格を取得することを求めている。

しかし、31年間、公立学校（中学5年、高校26年）で英語を担当してきた私には、平均的に見て、今の高校生の英語力が30年前の中学校レベルにまで落ち込んでしまったように思える。少なくとも、私が教えている高校生の中には、アルファベットを満足に書けない者（例えば、小文字のg, pなどを書く時、a, bなどの下部に揃えるように持ち上げて書くのである）があり、品詞の違いが区別できず、英和辞典で一つの単語を探し当

ても、コンテクストに適合した意味を探し出すことができない生徒が大半を占めている。また、基本文型が身につけていないため、自由作文を課してもほとんどの生徒がお手上げ状態なのである。

私は一昨年の夏、東北大学・宮城教育大学・東北学院大学・東北福祉大学の教員（7人）にインタビューし、最近の大学生の英語力に関する調査を実施した。先生方は異口同音に「学生の多くは、基本的に書く訓練を積んでいないので、語彙数が少なく文章の構成力が貧弱である。また、読書量が少ないため、歴史・社会生活・文学などに関する知識が乏しい。大学で完全なバイリンガルの状態を実現することは全く不可能である」と答えられた。

昨年から今年にかけ、私は東北六県英語教育研究大会・全英連全国大会などに参加して、「戦略構想」（名称は、2003年3月に「行動計画」と変えられた）に関するアンケート調査（回答者数は322人）を実施した〔別表参照〕。これを総合的に

教育の現場に検定のための授業を持ちこまざるよう気がする。~~また~~最終的に英検準2、2級卒の実力を付けさせたいと言っても、現場では、検定のための授業となるだろう。~~また~~英語ばかり力を入れても日本語が使えない生徒が多い。日本を理解し、日本での事柄、日本の意見を述べることでその生徒を育てることが急務である。high gradeの級を持つているが、文章を書けない(英文で)生徒が多いのも事実である。
まはた

A 教員の文章

英語の運用能力がつか、というのは大変結構ではあるが、どうすればその力がつかつか、というのは難しい。授業の時間内で英語の構造を理解させ、読解を付けさせ、更に自由に表現する力を身につけさせるとは、正直なところ厳しい。又、英検準2級、2級に合格することでその目的が達せられるとも思えない。学校の外国語教育の目標と、実際に行わざるを得ない授業の内容には、(ヤセ)ギャップがある。

B 教員の文章

アンケート集計結果

【質問 1】先生は、文部科学省が打ち出した『「英語が使える日本人」の育成のための行動計画』について、どのように思われますか。

a) 大変素晴らしいものだ	10人
b) 目標が持てるので歓迎したい	77人
c) 何とも言えない	142人
d) 教育現場の実情を全く無視したものだ	77人
その他	e) 賛成 …………… 0人
	f) 条件付きで賛成 …………… 4人
	g) 反対 …………… 12人

【質問 2】先生は、「将来、すべての高校生に英語検定試験の準 2 級もしくは 2 級の実力をつけさせたい」という文部科学省の構想について、どのように考えておられますか。

h) 間違いなく実現できると思う	5人
i) 三分の二位の生徒たちが達成できると思う	13人
j) 半分位の生徒たちが達成できると思う	32人
k) 三分の一位の生徒たちが達成できると思う	95人
l) 何とも言えない	86人
m) 全く荒唐無稽な構想だと思う	65人
その他	n) 賛成 …………… 3人
	o) 反対 …………… 23人

分析したところ、全国の英語教員の約72%（別表の c, d, g の合計人数を322で割ったもの）が、このプロジェクトに疑問を抱いておられ、約84%（k, l, m, o の合計人数を322で割ったもの）の方々が「あまり実効がない」と考えておられることが判明した。全国のすべての高校生の実態を踏まえて回答して下さるようお願いした結果が、これである。

「その他」の欄に、ある先生は次のように書いておられた。「(私は) スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクールの指定校に勤務していますが、(戦略構想の) 意義を感じていません。予算が与えられ、学校訪問で出張し、授業の視察があるだけで、現実の授業改善のための研修時間も、お互いに高め合うような余裕も時間もシステムもありません。ただ英語が喋れるだけの生徒(帰国生)はたくさん見てきましたが、それは一つの技能に過ぎず、教育とはかけ離れた次元の話だと思っています」と。岩手県水沢市の教員は、「毎日の積み重ねが最も大切だということは明白です。週3時間の授業では(『英語が使える日本人』の育成が) 不可能だということが、なぜわからないのでしょうか。家庭学習が毎日、自ら

できる位の意欲を生徒たちが持っていれば、〇〇計画も何もいらなと思います。また、教員の英語力が向上することがそんなに大切なことでしょうか。不適格なほどの英語力なら問題ですが、生徒を分析する力や時間、指導技術や教材研究をする時間を保障してくれる方がありがたい」と告白しておられた(さらに2人の教員の文章を、そのまま前頁下部に掲載したので、参照していただきたい)。

単位数を減らす一方で、英検における高得点を生徒に取得させようとするのは矛盾しているのではないか。また、英語教員がいくら語学力を磨こうが、家庭学習を全くしない高校生の英語力が増大することは絶対ありえないのである。

「話せる英語」幻想に惑わされるなど斎藤兆史氏と斎藤孝氏が力説しておられる(『中央公論』2004年3月号)。音読・暗唱・系統的な文法の習得・読解力の向上(⇒多読)などを抜きにして、英語力は向上するわけがない。文部科学省が打ち出した「行動計画」は、今の教育現場の実態を全く無視したものであり、間違いなく破綻するだろうと、私は予想している。

(くどう あきと・宮城県米谷工業高校教諭)